

詠風集

八月号



花鳥諷詠

8月号 (449号)

日本伝統俳句協会

花鳥諷詠[®]

令和7年8月 ■ 第449号 ————— 目次

花鳥諷詠選集	井上 泰至 2
	峯尾 文世 4

抜井諒一氏に聞く	田丸 千種 7
----------------	---------------

一頁の鑑賞	真篠みどり12
	大石 靖子13

この人の作品	七戸富美子14
--------------	---------------

卯浪	15
----------	---------

虚子研究 『六百五十句』 研究 (66)	16
----------------------------	---------

新刊紹介	23
------------	---------

大久保白村氏を送る	井上 泰至24
-----------------	---------------

書評	須川 久26
----------	--------------

そろそろ句集を作りますか?	27
---------------------	---------

新事務局スタッフ紹介	阪西 敦子29
------------------	---------------

風報	30
----------	---------

地区行事開催日程表	31
-----------------	---------

編集後記	32
------------	---------

「日本伝統俳句協会」と「花鳥諷詠」は公益社団法人日本伝統俳句協会の登録商標です。

表紙 川端龍子「桑港」(「ホトトギス」大正2年7月号)

花鳥諷詠選集

井上泰至選

特選五句

蝶のため百花あるなり空も又

高知 山中 倫雄

母の日や母に似し手を慈しむ

明石 今地 千鶴子

声かけて見たき近しさ山笑ふ

島根 服部 康人

灯台へ影なく歩みゆく薄暑

高松 福家 敬子

葉桜に又隠さるる小さき窓

大津 奥田 まゆみ

二句短評

一句目——「百花」と大きく括り、「空も」と畳みかけた。

このざつくりとした、しかし確かな把握が、蝶の美とその飛翔への愛を読者に伝える。

二句目——命を繋ぐのは、現実の「手」でもあり、作者の記憶に残った「手」の感覚でもある。こうして、愛は手を繋ぐことから始まる。

入選六十句

彼岸来る厨窓より夜の明けて

羽生 塩田 章子

花恋し人なほ恋し吉野かな

浜田 田中 静龍

花びらの影も真白き牡丹かな

印西 渡貫 悦司

草餅やどつと出て来る国訛

福岡 西村 芳山

咲き初めしより薔薇の香のうつろへる

鳥取 石尾 正子

山笑ふ吾もわらうて息深し

伊勢崎 飯塚 徳明

どの露地も匂ひ親しき薄暑かな

熊本 西村 孝子

あんぱんを食ぶ麦秋のど真ん中

高島 貫野 浩

牛蛙鳴いて夜陰を膨らます

糸島 宮脇 睦子

清掃をしてゐる人に花吹雪

福山 貝原 玲子

菖蒲茸く峠に近き饅頭屋

高知 河野 紅柳

万緑を映し硯の海光る

福山 小林 翠子

さはさはとゆれて若葉の森となる

横浜 黒山 敏恵

春眠が春眠を呼ぶ昼下がり

福岡 大石 靖子

草餅の重さを買うてしまひけり

神戸 玉手のり子

鯉跳ねて菖蒲の影の折れにけり 福岡 山口 裕子
 草笛を鳴らし一人の下校の子 松山 篠原みどり
 たんぽぽばん誰がつけし名ぞ鼓草 長野 鈴木しどみ
 老ゆること引き止めてゐる桜かな 姫路 英賀美千代
 先生は憧れの的しやばん玉 太宰府 持永真理子
 又分岐する山道や滴れり 半田 稲葉 京閑
 若葉風若葉の千切れさうになる 春日部 吉川あかし
 母と歩を合はす山みち若葉風 太宰府 柴田慧美子
 避難所の閉ぢて地震の地春深し 金沢 三島由紀子
 手解きは里の訛や祭鮒 神戸 齊木 富子
 吹き習ふ草笛やつと風にのる 伊賀 永井二紗子
 牡丹に一札をして執る絵筆 神戸 片岡 橙更
 初めての茅の輪くぐりや息止めて 刈谷 境 雅代
 移り住む杜の都の花過ぎし 仙台 成田 晃子
 合鍵のまだ捨てられず春惜む 札幌 齊藤 和加

茶を点てる名残の花の下に来て 徳島 吉崎 礼子
 短さに影ともならず藤の花 福岡 杉原久美子
 桐の花糸引くやうにこぼれけり 久留米 平岡 清志
 慳若葉日に日に山に馴染みをり 福岡 古賀 博子
 湖風に逆らひながら麦を踏む 大阪 山内 繭彦
 小魚の群るる浅瀬や夏に入る 東京 大和田博道
 この里に生れて老いけり蓬餅 糸島 藤原 泰子
 母の日や母亡き孫の贈り物 大阪 小林 伸子
 ぬらぬらと筒の奥より穴子の眼 静岡 堀内 智子
 薫風や小学校の昼チャイム 倉敷 芳賀 一世
 かき抱く純金の薬黒牡丹 高崎 津久井洋子
 雪柳心のままに揺れてをり 穴栗 堂元 節子
 朴の花見下ろす谷の深さかな 高崎 塚越 章江
 力抜く時草笛のふと鳴りぬ 神戸 金田八江子
 飛火野の触れたきものに袋角 泉大津 山田 佳音

● 峯尾文世選

特選五句

牡丹の崩るる時は誰も居ず

久留米 野口 桂子

黒潮の帯の極まる立夏かな

成田 川名部さと志

牡丹に一札をして執る絵筆

神戸片岡 橙更

夏木立等間隔がまた凜凜し

加賀堀口 紀子

手より目が先に筍掘つてをり

西宮 山之口 倫子

二句短評

一句目——崩れるときのさまを誰も見なかったという。その姿を見せないのが牡丹の矜持であるかのよう。火の奥にまぎまぎと崩れるさまを見せるのがある種の威厳であるならば、ここに描き出されたそれもまた威厳高々である。

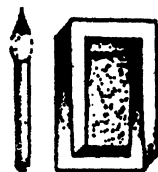
二句目——黒潮のくきやかなる帯状のうねりが、夏の到来を確と教えてくれる。その流れを、柔道の黒帶有段者の雄姿と捉えたくなってしまうのは、字面のせいであろうか。いずれにしろ、黒潮の雄大さが見て取れる。

母の日や母の塩梅追ひ求め	鳥取 椋 則子
田植機の人に目礼交はし行く	阿南 谷川 宗和
牡丹咲く城に滅びのむかしあり	鹿児島 永井 紀子
葉桜となりやすらぎの道となり	東大阪 東野太美子
まつ直ぐに零るる花をえごと言ふ	四国中央 豊田みゆき
軽暖のこころ自づと水に添ひ	高松 浅野クニ子
これよりは好きに生きよと山笑ふ	久留米 矢野 愛子
初夏の街を二手に分ける川	藤岡 清水 静子
重さうに空を揺すりて花の枝	西脇 岸本 悦子
初めての靴は空色野に遊ぶ	浜田 三沢 孝子
竹皮を脱ぐや昨日を脱ぐやうに	岡山 石井 宏幸
おにぎりの塩きらきらと夏に入る	武蔵野 内藤 花六
白鷺のゆらり降り立つ春の川	上山 立花 厚子
産土の川麦秋を真つ二つ	熊本 堀 伸子
恨まるる定めに生れし根切虫	高知 前田まこと

入選六十句

文豪の像を拭ふや若葉雨 高松 小林美智子
 よき朝がカーネーションに来てをりし 海老名 野村香代子
 崩れゆく牡丹に軽き悼みあり 大牟田 介弘 紀子
 松蟬や風の乱れに鳴き急ぐ 岡山 岩崎 正子
 風の影映して春の障子かな 大牟田 石橋 武子
 夏近し山の鳥語の入れ替はる 金沢 金谷 優子
 きよろきよろと足ばたばたと新人生 徳島 奥村 里
 チューリップ協奏曲に躍らされ 富山 武田 律子
 高く咲き匂ひこぼさぬ桐の花 富山 内田 千年
 草引の老いの日課に加はりぬ 南国 高橋 以登
 黙もくと黒ぐろと地を毛虫かな 京都 本谷眞治郎
 旅人の軽装十色京の初夏 加賀 正藤 宗郎
 虻の来て庭の主のごと唸る 福岡 黒田 純子
 信心に踏み固められ遍路徑 太宰府 白石 照子
 我もまた花人となり人につく 福山 濱田喜代恵

薫風や応援団のランニング 尾道 大庭 弘
 行き先を決めず飛び乗る春うらら 堺 新田佐代子
 ほととぎすまたほととぎす鋤を打つ 狭山 加藤 公男
 師の眠る山の老鶯鳴きやまず 井原 鈴木 千恵
 地僧道抜け邂逅の藤浄土 奈良 堀田 建夫
 手解きは里の訛や祭鮓 神戸 齊木 富子
 旅途次の造酒屋の夏のれん 金沢 松田とも子
 かがよへる五月に生を享けしこと 福岡 下原口允子
 吹き習ふ草笛やつと風にのる 伊賀 永井二紗子
 初夏の三面鏡に翼あり 小諸 丸山 ま美
 甲冑に映る若葉や城演武 高松 佐々木 新
 海酸漿きゆつきゆつと昭和引き寄する 福岡 梶原 敏子
 風音に遅れて走る春落葉 高松 福江 昌子
 津軽富士映して代田できあがる 平川 丹野 慶子
 桐の花糸引くやうにこぼれけり 久留米 平岡 清志



編集後記

風が吹く仏来給ふけはひあり 虚子

自殺した友人藤野古白の旧居で、故人を慕っての新盆会会の時のもの。季語はないが、季感はある。

一句は、おそらく迎火に風が通ったものか。文学の革命に命を賭けた若者たちは、維新の志士並みの、非業の死を覚悟していた。その頭目だった子規自身、末期には自身を「仏」と呼んでみせている。

○六月の総会の前後に、遠藤風琴氏(富安風生ご養女)、辻桃子氏、七月初旬には、今井千鶴子氏の計報が続け様に入りました。皆さま理事として、大変

全国大会会場変更のお知らせ

九月十五日(月)に予定しております岡山の全国俳句大会は予想以上の参加申し込みがあり、会場を変更して、前夜祭と同じ岡山プラザホテル Annex の五階延養の間で行うことになりました。

(JR岡山駅東出口バスターミナル1番乗り場「藤原団地」行き乗車。「蓬

お世話になった方々です。ご冥福をお祈りいたします。

○昨年九月から事務局に勤務している潮見智さんの紹介記事を載せました。聞き手は九月二十四日から新事務局長に就任する予定の阪西敦子さんです。主に外回りの仕事をやって頂きます。笹塚の本部には、既に基本週二日、私自身が結めて対応しております。これまでの会長と異なる、都心在住の井上からの電話連絡や対応が多くなってきました。そういう事情によります。

(井上泰至)

菜橋・夢二郷土美術館前」下車すぐ
〔後楽園前〕の次の停留所〕

ついては、事前に申し受けしましたタクシー代は当日お返しいたします。

また、十五日の句会は、席の余裕がありますので、予約なしでのご参加が可能です。

問い合わせ先 石井宏幸

☎ 090-8364-6142

花鳥諷詠八月号(通巻第四四九号)

定価一、二〇〇円 但し、本代は年会費に含む
年会費一〇、〇〇〇円

令和七年八月一日

発行人 井上泰至

発行所 公益社団法人

日本伝統俳句協会

〒151-0073 東京都渋谷区笹塚二-18-19

シャンブル笹塚二-B-10-1

電話 〇三三四五五五一九一

FAX 〇三三四五五五一九二

郵便振替 口座番号 〇〇一六〇一七-八六八二〇

印刷所 日本ハイコム(株)

〒112-0014 東京都文京区関口一-一九-二